

課題0 ウォーミングアップ

まず、以下のキーワードについてどのくらい知っているかマークを付けてください。

(◎)よく知っている。説明ができる。

(○)知っている。自信はないが説明できる。

(△)聞いたことはある。何となくこういうことか、というイメージはある。

(×)聞いたことがない。

()直接法

()オーディオ・リンガル法

()コミュニカティブ・アプローチ

()コミュニケーション能力(伝達能力)

()インターアクション能力(相互行為能力)

()客観主義的教育観

()(社会)構成主義的教育観

()社会文化的アプローチ

()状況的学習論

()ストラテジー

➤ 学習ストラテジー・コミュニケーションストラテジー

()認知・メタ認知

()自律(的)学習・学習者オートノミー

グループになって、自分が知っていることについて、説明してみてください。また、人が知っていることと、自分が知っていることが同じかどうか、どこが同じで、どこが異なっているかなどを確認してください。

課題1 言語教育のパラダイムシフト

資料を読んで、以下の点について自分なりのメモ(A4 1枚程度)を提出すること。ハンドアウトではなく、話し合うための自分用のメモ、箇条書きでかまわない。

締め切り：来週の水曜日の午前中

資料：佐々木倫子(2006)「パラダイムシフト再考」『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性』アルク, p.259-283.

目的：p.259に「日本語教育を実践する教師にはどのような知識と能力が必要だろうか」とある。教師に求められる知識と能力は、その「パラダイム」によって異なっている。課題1の目的は、それぞれのパラダイムで求められてきた知識と能力は何か、そして、なぜそのようなパラダイムのシフトが生じたのかを自分なりに把握することにある。

1)p.259に第1のパラダイムシフト前の「1960年代、1970年代の多くの日本語教師の主たる関心」について簡単に説明されている。この時代、教師に求められていた知識と能力とは何か、そして、学習者が身につけるべき知識と能力は何で、学習者はどのようにしてそのような知識と能力を身につけられると考えられていたか。概説書や文献も調べながら、上記の答えを自分なりにまとめること。インターネットも参照してもいいが、かならず文献から引用されているものを選ぶこと。文献等から引用する場合には、その資料を明記すること。(以下同様)

2)p.253には、「(その専門性は)古いパラダイムに基づくもの」から「日本語教育パラダイムの転換が始まった。」とある。この第一のパラダイムシフトでは、何がどのように変化したのか。また、そのパラダイムシフトが起こった要因は何か。

(以下のキーワードの概念を考えながら説明すること)

・ コミュニカティブ・アプローチ シラバス アクティビティ

3)p.270-272には第2のパラダイムシフト後の「教育理念」が解説されている。ここでは、第一のパラダイムの教育理念である「客観主義的教育観」と「構成主義的教育観」が対比して説明されている。「客観主義的教育観」とはどのような教育観か。そして「構成主義的教育観」とは、それぞれどのような教育観か。

4)p.274の図には「教育する」＋「支援する」＋「共生する」とある。言語学習を支援する、という場合の教室(あるいは教育機関)の役割は何か。そして、「共生する」場合に教師にはどのような知識と能力が必要なのか。学習者にはどのような知識と能力が必要なのか。

注意)

- ・資料には明文化されていないが、「能力観(何を身につけるのか)」と「習得観(どうやって身につけるのか・身につくのか)」も考えながら読むこと。
- ・わからない部分、自信がない部分は、「どこがわからないか」、「どこまでわかったか」を自覚すること。メモは「この部分が？」という書き方でもかまわない。「ここの意味がわからない」でもかまわない。
- ・わからない部分は、自分なりの推測、仮説を立ててみる。「こういうことかな」でもいいので、とりあえずメモを取る。

来週の授業ではグループになり、上記のポイントについての話し合い・説明を行う。

以下、任意の応用課題。提出は不要。また、授業でも扱わない。

- 1)p.260では英国、米国、ヨーロッパにおけるパラダイムシフトが説明されている。そのシフトが起こった要因は何か、そして、それまでのパラダイムとは異なり、何が重視されるようになったのか。
- 2)p.260の「学習者中心主義」と「経験主義」とは何か。
- 3)p.261にRichards & Richards(2001)のコミュニカティブ・アプローチの理念が説明されている。
 - ・「流暢さ」とは所謂「すらすら、ぺらぺら」話せることか。それ以外の要素も含むのか。
 - ・「学習は創造的なプロセス」とはどういうことを意味しているのか。
- 4)p.270の「一人の人の言語環境と言語管理の全体像を頭に置いた上での支援」と「コミュニカティブ・アプローチのシラバス」や「客観主義的教育観」とは支援はどう異なるのか。

その他参考資料

- ・ジャック C. リチャーズ & シオドア S. ロジャーズ(2007)『アプローチ&メソッド
世界の言語教授・指導法(アントニー・アルジェイミー&高見沢孟監訳)』東京書籍

課題1の進め方

(教育経験者、未経験者、留学生、研究生など混在するように)グループになり、課題1で自分が考えてきた内容についてメンバーに説明してみる。また、疑問点がある場合には、それについても話し合う。グループで一つの考え方にまとめる必要はない。〇〇という解釈もあるし、××という解釈もある、という列挙でかまわない。以下、提出物で「キーワード」になると思ったことばを列挙する(順不同。資料には含まれないものも有)。これらの概念も考えながら、話し合うこと。

また、自分自身の学習経験を振り返り、自分はどのパラダイムで学習してきたか、また教科書等はどのパラダイムに基づいて作成されてきたか、教師経験者はどのようなパラダイムで教育を行ってきたかを考えながら、議論してほしい。

- 1) オーディオ・リンガル法・直接法・日本語の言語(発音・語彙・文法・表記)・正確さ・流暢さ・自動的・模倣・暗記・習慣形成・母語話者・音声言語・話し言葉・文型練習・パターンプラクティス・ミニマム・言語分析・対照分析・構造言語学・行動主義心理学
- 2) コミュニケーション重視・コミュニケーション能力・本物のコミュニケーション・疑似コミュニケーション・コミュニケーション能力・アプローチ・シラバス・ニーズ・アクティビティ(シュミレーション・ロールプレイ・プロジェクトワーク・ビジターセッション)・多様化・第二言語習得理論・中間言語仮説
- 3) 知識の効率的伝達／伝授・知識の受容的受容・受動的・能動的・自律・協働(共同／協同)・参加の保障・ファシリテーター・学習を管理・コミュニティ・正しい知識・正しいコミュニケーション・実践的参加
- 4) 「教育する→支援する→共生する」ではなく、「教育する+支援する+共生する」であることに注意。「教育する」がなくなったわけではない。「教育する」だけではないことに注意。

学習支援・学びの促進・学習管理・ファシリテーター・カウンセラー・自己成長力・実践的参加・計画能力・自己評価・接触場面・社会的構成員・自己管理

課題2 コミュニケーション能力について(1)

資料を読んで、以下の点について自分なりのメモ(A4 1枚程度)を提出すること。ハンドアウトではなく、話し合うための自分用のメモ、箇条書きでかまわない。

締め切り：来週の水曜日の午前中

資料：サンドラ・サヴィニョン(2009)「コミュニケーション能力の定義」『コミュニケーション能力[原書第2版-理論と実践(草野、佐藤、田中(訳))法政大学出版, p.9-65.

(このうち、来週は27ページまでを扱う)

参考資料：R.C.スカーセラ & R.L.オックスフォード(1997)『第2言語習得の理論と実践-タペストリー・アプローチ-(牧野訳・監修/菅原他訳)』松柏社, p.96-106.

目的：p.10に「『コミュニケーション能力』という概念にはどんな意味があるのだろうか。そこには将来の第2言語教育の発展について何が暗示されているのだろうか。」とある。課題2の目的は、第一のパラダイム・シフト後の基本的な能力観(何を身につけるのか)を理解することにある。

1) p.12に「コミュニケーション-相手に伝えたいことを理解させる-」とあり、p.13には、「私たちはこうして意味とは必ずしも一方的に伝達できるものではないと学ぶのだ。意味は関係する人々の間の交渉によって決まる。」とある。また、p.15には「コミュニケーションとは、意味の表現・解釈・交渉の連続過程である。」ともある。なぜ伝え手は伝えたいことを一方的に伝えることが不可能なのか。母語話者の交渉例を取り上げ、コミュニケーションとは「意味の交渉である」ということを説明してください。

2) p.15-18には、自分のメッセージを人に伝える言葉以外の「道具」が説明されている。どのような「道具」が使われているか。日本語によるコミュニケーションの例を挙げつつ抜き出すこと。また、p.15にある「レジスター、あるいはスタイル」とは何か。参考資料も見ながら、具体例を考えること。

3) p.18 にはコミュニケーションにおける能力が説明されている。(参考資料では p.102 に同様の説明。但し、用語の翻訳は異なる)

- ・ 「コミュニケーション能力は静的な概念ではなく、動的なものであり、～意味の交渉によって決まる。この意味でコミュニケーション能力は個人のものというよりは、対人関係に基づくという特徴を持つ。」、「コミュニケーション能力は絶対的でなく相対的なものであり、参加者すべての協力によって成立する」、「コミュニケーション能力はコンテキストに特定された能力である。」とは何を意味するのか。インタビューテストの信頼性などを例に挙げながら、この概念を説明せよ。

●以下で説明されている「能力」の定義は「知識(知っていること)」と「使用する能力(できること)」の両方を含んでいるのか、それとも一方しか含んでいないのかを考えながら読むこと。

4) p.20 で説明されている Chomsky の「文法能力」の定義と課題は何か。何を作る知識または能力を定義しているのか。

5) p.21 から Hymes のモデルが説明されている。Chomsky が問題にした「正しさ」と Hymes が問題にしている「適切さ」とは何が異なるのか。「正しいもの」「正しくないもの」、「正しいが適切ではないもの」など具体的な日本語運用の例を挙げ、説明すること。

6) p.24 には Halliday が定義する言語の三つの基礎的機能が説明されている。それぞれの機能は具体的にどのようなものか。具体的な日本語運用の例を挙げ、説明すること。(参考資料、P.100 にも同様の説明がある。但し、用語の翻訳は異なる)

課題2の進め方

提出された課題で、少し回答の幅が広い部分は、以下に限定のための再質問を出しておきます。以下の問いかけも参考に、グループで回答を出し合ってください。

- 1) 言葉による100%の意味の伝達はあり得るのか。伝え手の頭の中に最初から伝えた意味内容というのは100%構築されているのか。
 - ・ 意味の理解、伝達というのは、デジタルデータのコピーのように伝達されるのかどうか。「意味交渉」とはどのようなやりとりを指すのか。
 - ・ 母語話者同士(同じ名古屋人であっても)でも意味は必ずしも一方的に伝達できるものではない。意味は関係する人の交渉によって決まるのではないのか。
- 2) この授業において、課題内容をグループで話し合うときと全員の前で一人ずつ発表するときの話し方、言葉づかいは同じかどうか。その差はレジスターの一種か、スタイルの一種か。
 - ・ 現在問題になっている看護師試験で出てくる用語例。「咳嗽(がいそう)」、「清拭(せいしき)」、「浮腫(ふしゅ)」などはレジスターの一種か、スタイルの一種か。
- 3) 「コミュニケーションが動的」ではなく、「能力が動的=可変的である・絶対的ではない」ことに注意。どのような要因が能力の変化をもたらすのか。
 - ・ 手書きで手紙を書く、PCメール、携帯メール、個人の中で全ての能力は同じかどうか。
- 4) Chomskyの文法能力は「知識」を指しているのか、「文法的に正しい文が作れること=できること」を指しているのか。
 - ・ 「ここ、暑いですね」という発話が「エアコン、つけてください」という含意を表す、ということは言語学の対象外(科学の対象外)だ、というのが当時のChomskyの考え。

課題3 コミュニケーション能力(2)

資料の後半を読んで、以下の点について自分なりのメモ(A4 1枚程度)を提出すること。
ハンドアウトではなく、話し合うための自分用のメモ、箇条書きでかまわない。

締め切り：来週の水曜日の午前中

1) p.31 にオーディオ・リンガル・メソッドの原則、p.35 にコミュニカティブ・アプローチの原則が要約されている。この要約及び前後の内容から二つの原則を以下の観点から整理してください。

- ・ 習得・学習に対する考え方(習得観・学習観)
- ・ 教材開発・カリキュラム作りの基準
- ・ 練習の単位
- ・ 教師の役割

2) p.36 からコミュニケーション理論の三つの解釈(表層構造から意味へ、意味から表層構造へ、コンテキストの明確化)が説明されている。このうち、40 ページ以降に説明されている Rivers、Valette は、コミュニケーション能力はどのように習得(あるいは学習)されていくと提言しているか、一方、p.44~45 で説明されている Widdowson はどのような提言をしているか。この二つの理論に対する皆さんの考え方はどうか。

オプション) p.38 に以下の内容がある。この内容から考えると、コミュニケーション能力教育の目標は、第二言語話者ではない、と言えるかもしれない。これに対してどのように考えるか。

- ・ 第2言語の文化というものが一つだけではなく、各々が違った一連のルールを持って、複数存在するかも知れないからである。もっと重要なことに、第2言語がその言語を母語とするコミュニティーの外で、非母語話者によってコミュニケーションの道具として広く使用されているかも知れない。
- ・ 理解は母語話者の言語学的、社会言語学的な形式の模倣ではなく、関係者間の意味の交渉によって成立しているのである。

3) p.49 ページ以降、Canale(1983)が提唱しているコミュニケーション能力が説明さ

れている。例えば、日本語学習者が下のような文を話したり(ア～オ)、行動したり(カ)したとする。不自然や不適切だと思われる部分があるとすれば、それは Canale が説明している文法、社会言語、談話能力のうち、何に起因するものか(あるいはそこには含まれない原因があるのか)。

ア)(会話で質問に答えて)3時まで がこうで べんきよします。

イ)子供の頃は 毎日 野菜を 食べさせられました。

ウ)日本人：きのう、田中さんに会いました。

学習者：ああ、この人は元気でしたか。

エ)(本を借りようとして)先生、この本読んでくださいますか。

オ)(面接試験で)はじめまして。僕は陳だよ。中国から参りました

カ)前回ご馳走になったことに対してお礼を言わない。

4) p.55 からは方略的能力が説明されている。日本語学習者が方略を使った結果、不自然や不適切な日本語になる場合もある。しかし、それでも方略的能力を使ったほうがいいのか。方略的能力を使うことでコミュニケーション能力の習得にどのような効果があると考えられるか。

*ここで取り上げている方略的能力とは、あくまでも「コミュニケーション上の障害、問題を会費、解決するための方略に限定されていることに注意

課題4 伝達能力(コミュニケーション能力)から相互行為能力へ

資料の後半を読んで、以下の点について自分なりのメモ(A4 1枚程度)を提出すること。
ハンドアウトではなく、話し合うための自分用のメモ、箇条書きでかまわない。

締め切り：来週の水曜日の午前中

資料：義永未央子(2005)「伝達能力を見直す」『文化と歴史の中の学習と学習者-日本語教育における社会文化的パースペクティブ』凡人社, p.54-78.

目的：p.54 に以下の三つの課題が明示されている。この答え、及び追加のキーワードを自分なりにまとめられることを意識しながら読み進めること

- (1) 言語や言語教育における議論の中で、伝達能力はどのように捉えられてきたか。
 - (2) 社会文化的アプローチの伝達能力観は、従来の伝達能力観とどのような点で異なるか。
 - (3) 社会文化的アプローチに基づいた新しい伝達能力観は、第二言語教育の実践にどのような示唆を与えてくれるか。
- ハイムズ → カナール&スウェイン → バックマン/スヴィニョンの伝達能力の定義とその変化
 - 社会文化的アプローチ ・ 相互行為的能力 ・ 相互行為的実践 と伝達能力の比較
 - 「客観主義的教育観」VS「構成主義的教育観」(佐々木・課題1)
「習得メタファー」VS「参加メタファー」
「コミュニケーションティブ・アプローチ(課題2)」VS「社会文化的アプローチ」

★ p.57 から紹介されているバックマンのモデルは、現在も強い影響力を持つモデルである。言語教育、評価に興味がある人は、以下の参考文献も読み、このモデルの構成要素と関係を把握しておくことが求められる。

- ・ Bachman, L.F.(1990)"Communicative language ability", Fundamental Considerations in Language Testing.81-110.
- ・ L.F.バックマン&A.S.パーマー(2000)『<実践>言語テスト作成法(大友・ランドルフ監訳)』大修館, p.22-27

1) p.57 の図には 5 つの構成要素(○)が描かれている。このうち「場面の状況 (CONTEXT OF SITUATION)」は外部環境に属するものであり、それ以外は話者の内部に属するものである。例えば、「ここ、暑いね」という発話が「=エアコンつけてください」という意図と解釈されるためには、どのような要素(例：人間関係)が「場面の状況」には必要か。

オプション)p.57 図 2 の「心理・生理的機能(PSYCHOPHYSIOLOGICAL MECHANISMS)とはどのようなものだと考えられるか。「場面の状況」から矢印が出ているが、どのような情報を受け取り、送るのか。

2) 方略的能力(Strategic competence)はどのような働きをするのか。カナル&スウェインの方略能力とはどのように異なるのか。

オプション)図 1 の「発語内能力」とはどのような知識を指すのか。具体的な例を考えてください。

3) p.60 から 63 にかけて「コミュニケーション」とはどのような性質を持つものかが説明されている。このうちの「協働的構築」について「コードモデル」と対比しながら、「意味交渉」「発話の型(ジャンル)」などのキーワードを使って説明すること。

4) p.65 では「伝達能力」と「相互行為能力」を対比させながら説明している。これらの二つのキーワードを対比的に整理すること。

5) p66 では能力は個人に属するか、協働で達成されるものかが説明されている。課題 2 の 3) でインタビューテストの信頼性について取り上げたが、再度、「動的」「対人関係」「コンテキストに特定」などの概念を使って「協働で達成されるもの」という主張を整理すること。

6) p.67 には「習得メタファー」「参加メタファー」についての比較が出ている。この

二つの概念を課題1で出てきた「客観主義的教育観」「構成主義的教育観」との関連性に注意しながら整理せよ。

- 7) p.70には従来の第二言語教育の目標と「参加メタファー」に基づく第二言語の目標が説明されている。この対比を整理し、かつ「海外で外国語として日本語を学習する」場合には後者の目標が成立するかどうか、また、後者の目標についての各々の意見を述べること。

課題4を進めるにあたって

★ 1)～7)は必須課題、オプション)としたのは任意課題ですので、これは特に記述の必要はありません。ただ、グループでの話し合いにおいては、オプションの課題も取り上げてください。

★ 私は、この sheet も一種の意味交渉の過程であると考えている。提出された課題を見ると、最初の課題を出した時点では「頭になかった」課題が出てきたり、もう少し理解を深めてほしいと考えてこの sheet を「第二発話」として出します。

1)考えるヒントとして、「『ここ、暑いね』という発話が『=エアコンつけてください』という意図と解釈される状況」を設定して、ロールプレイをすると想定してほしい。できるだけ実際の場面に近いものを再現するためには、ロールカードを記述する際、どのような項目を記述しなければならないか。「人間関係」「物理的状況」「(感覚的・体感的)環境」「時間・時期」「既に話された文章」など多面的に創造してほしい。

2)バックマンの「方略的能力」はなぜ5つの構成要素の中央に存在しているのか。それぞれの構成要素と結ばれている矢印では、どのような情報がやりとりされ、それが「方略的能力」でどう処理されるのかの観点からも考えてほしい。

3)と5)は一緒に、4)と6)は一緒に考えてほしい。順番が不適切でした。

6)7)で取り上げられている「共同体」は、学習対象となる言語のネイティブスピーカーの共同体とは限定されないことに注意。クラスも一つの共同体となり得るし、異なるレベルや学年が存在すればそれらを合わせて一つの共同体ともなり得る。

課題5 オーディオ・リンガルからコミュニカティブ・アプローチへ

以下の資料では80年代からの教育実践例を紹介している。資料では存在文を例としているが、本講義では『みんなの日本語第13課』の文型を例に挙げ、どのような教室活動が考えられるか。そして、そのパラダイムに基づく教室活動にはどのような長所と短所があるかを考える。以下の点について自分なりのメモ(A4 1枚程度)を提出すること。話し合うための自分用のメモ、箇条書きでかまわない。

締め切り：来週の水曜日の午前中

資料：衣川隆生(2009)「教室と能力観・学習観・教育観」『日本語教育の過去・現在・未来 第3巻 教室(小林ミナ・衣川隆生(編著)水谷修(監))』凡人社, p.22-45.(課題5では22-31を扱う)。

目的：パラダイムシフト以前の能力観・学習観・教育観、第一のパラダイムシフトにおける能力観・学習観・教育観に基づき、具体的な教室活動を考える力を身につける。

- 1) p.23~25に1980年代における教授法が紹介されている。「～たいです」「～ほしいです」を例とした場合、どのような「提示→練習→応用」が考えられるか。具体的にいくつかの教室からの指示や発話を取り上げること。
- 2) 1980年代における教授法に基づいて考えた1)の教室活動にはどのような課題、問題点が存在するか。
- 3) p.26~p.27には「機能」「目的」「談話」という用語が使われている。「～たいです」「～ほしいです」を例とした場合、どのような「機能」「目的」「談話」が考えられるか。また、その談話はどのような文脈で生起すると想定できるか。
- 4) 「～たいです」「～ほしいです」を例とした場合、p.28にある「目標設定」「提示」はどのようなものが考えられるか。また、p.29で説明されている「転移」にはどのようなものがあるか。
- 5) p.30にある「選択権」は上記4)で考えた「目標設定」「提示」「転移」では保障されているか。

注)この本ではバックマンの言語能力の四つの構成要素を文構成能力(GRAMMATIACL

COMPETENCE)、談話構成能力(TEXTUAL COMPETENCE, 以下談話能力と略す)、機能能力(ILLOCUTIONARY COMPETENCE)、社会言語学能力(SOCIOLINGUISTIC COMPETENCE)と訳している。

課題5の進め方

1)2)提出課題の中には、最初の「提示」の部分で概念や形式の説明を入れる、という提案があったが、1980年代のいわゆる「直説法」、または「オーディオ・リンガル法」においては「媒介語の使用」や「説明」はしてはならないものであった。P.24の浅野の解説に「①耳の訓練、②口慣らし、③音と意味の結合」とあるように、意味や形式は繰り返し練習することによって結果として理解される、という考え方である。しかし、このような提示方法は「推測ゲーム」とも批判され、その後文法解説書の必要性や、媒介語の利用も奨励されるようになってきている。今回は理論に忠実に「説明・媒介語なし」で進めてみる。

- ・ グループで何人かが教師の役割を持ち「提示」の部分を実際にやってみる(説明ではなく模擬で)。学習者役のメンバーはその提示方法からどのような「意味概念」が推測できるかを少々意地悪く当て推量してみる ⇒ 誤解の可能性の検討。
- ・ 何人かが実際に、応用、練習をやってみる。その際、学習者役のメンバーは「意味を考えながら練習できるかどうか(意味を考えなくても形式だけ考えれば答えが言えるかどうか)」、「教師のキュー、指示のどこに意識を向けているか」などを考えながら役割を果たす。
- ・ 実際に人がコミュニケーションの場面で「～たい」「～ほしい」を使うときの思考の流れ(例えば、バックマンの伝達能力の構成図の矢印の流れ)のどの部分を使っているか、どの部分を使っていないか、どの矢印が機能しているかを考える。

その上で、2)の問題点を検討する。課題では「文構成能力は身につくが、伝達能力は身につかない」という回答が多かった。個人的には「教室内での文構成能力は身につくが、実際の接触場面では文構成さえできない可能性がある」とも考えている。上記の・の項目を考えながら、なぜ伝達能力が身につかないのかを検討する。

3)4)5)

3)の「機能」とは注に入れたように(ILLOCUTIONARY COMPETENCE)を指す。これは実際のコミュニケーション場面で「希望を述べることによって何を達成するか」を表す

ものである。もちろん、単純に希望を述べることもあるが、それ以外にも可能性は「許可を求める／依頼する(わあ、見たい、見たい！！)」「賛成／反論する(私は・も～したいです)」なども考えられる。また、「談話内における機能」というものもある。「すみません」は「感謝」「謝罪」「呼びかけ」などの機能を果たすが、ある談話内では「呼びかけることによって談話を開始する」という機能も持つ。また、社会文化、談話、文脈が異なれば、同じ形式でも同じ機能が果たせないことも多い。上記の点を考慮して、皆さんが考えた「機能」「目的」「談話」「文脈」を検討し、精緻化すること。例えば、「相手の希望を聞く」という機能、目的で「～たいです」を使うことを想定した場合、ある文脈では適切であっても、ある文脈では不適切(例：先生、これ食べたいですか)となる。文脈などの制限がないかどうかを検討すること。

4)「目標設定」は、3)で設定した「機能」「目的」「文脈」などを学習者に理解させ、それを実際に教室で試行的にやらせてみることを挙げている。教室で上記の「機能」「目的」「文脈(心理状態も含めて)」を理解させ、試行することが本当に可能かどうかを検討してみる。また、「転移」でも同様である。他のメンバーが同じ「機能」「目的」「文脈」を与えられた場合、どのような「談話」が自然に生起するかを考えてみる。その談話は課題で想定した談話とはどう質的に異なるかを検討することで、5)の選択権も検討する。

「提示」においては類似した「機能」「目的」「文脈」の例をある程度の「量」示すことが求められる。バリエーションを考えることが可能な「機能」「目的」「文脈」かどうかを検討する。

課題 6

課題 5 の資料 31 ページ～35 ページを読み、「～たい」「～がほしい」を題材とした場合、どのような教室活動が考えられるか。そして、そのパラダイムに基づく教室活動にはどのような長所と短所があるかを考える。

参考資料：リチャーズ,J.C・ロジャース,T.S.(2007)『アプローチ&メソッド世界の言語教授・指導法』東京書籍.(ナチュラルアプローチ・サイレントウェイの部分)

1)p.31-32 に「インプット」の説明がある。ここでのキーワードは「コミュニケーションのために使われている言語運用」「i+1」「文脈による手がかり」「言語外の情報」「一般的な知識」の利用、などが挙げられる。「～たいです」を主要項目として、その形式を含み「コミュニケーションのために使われている言語運用」を2つ考えること。また、その言語運用を理解させるためにはどのような「文脈による手がかり」「言語外の情報」「一般的な知識」を利用することが可能かを検討する。

2)p.32-35 には「サイレントウェイ」の説明がある。方法論は別として「学習観」あるいは「教育哲学」は非常に参考になる。「なぜ、教師は1回しか例を示さないのか」「なぜ、学習者に正しい知識を提示・説明しないのか」の理由を、資料を参考に自分なりにまとめること。

課題 7

これから、「場所を説明する＝留学生センターを紹介する」という三種類の活動を見てもらいます。それぞれの活動を行うことにより、どのような能力が習得されると考えられますか。以下のキーワードが示す概念を思い出しながら、比較してみてください。

活動事例 1

次のような指示を与えています。

- 1) 教室や留学生センターや宿舎に何があるかを説明してください。
- 2) 絵を見て先生の質問に答えてください。そして絵の中に何があるかを先生と同じように質問してください。

活動事例 2

「留学生センターを紹介する」というプロジェクト・ワークで作成したビデオの一部です。学生が協働でスクリプトを作成し、撮影し、編集した紹介ビデオです。後の議論ではビデオの内容だけではなく、撮影、編集に至るまでの過程も検討すること。

活動事例 3

留学生センターにゲストを呼び、留学生センターを紹介するという活動です。次のような指示を与えています。

- 1) 今日は、留学生センターを歩きながら、紹介したいと思います。留学生センター2階の入り口入り口から何が見えるか、どんな施設があるかを紹介してください
- 2) 留学生センターの2階を歩いて、紹介してください。a) 留学生センターの2階には何があるか、どんなものか、b)そこで何をするか、d)誰がいるかを紹介してください。
- 3) 留学生センターの1階に降りて、1階を紹介してください。a) 留学生センターの1階には何があるか、どんなものか、b)そこで何をするか、d)誰がいるかを紹介してください。

ポイント

それぞれの活動は、どのような能力に焦点を当てた活動だと考えられるか。または、これらの活動を行うことによってどのような能力が身につくと考えられるか。以下のキーワード、引用を念頭に置き、三種類の活動を比較しながらグループで検討してください。

1) 知識・能力(何を使って活動しているか、何が身につくか)

(ア) 狭義の言語能力(=構造主義言語学に基づく文法能力)

(イ) ハイムズ・カナル&スウェインの提唱した伝達能力(用語はサヴィニョン,2009, P.49による)

- ① 文法能力
- ② 社会言語能力
- ③ 談話能力
- ④ 方略能力

(ウ) バックマンの意思伝達言語能力(用語は義永, 2005, P.59による)

- ① 知識構造
- ② 方略的能力(バックマンの方略)
- ③ 心理・生理的機能
- ④ 場面の状況

(エ) Hall等の相互行為能力(用語は義永, 2005, P.64による)

2) 知識・能力のとらえ方(「 」の用語は義永, 2005による)

(ア) 知識・能力を抽象的、「一般的で包括的なもの」と見なしているか、「具体的、個別的、状況依存的」と見なしているか。

(イ) 知識・能力の習得を「客観的に抽出された規則体系を身につけていく」という客観主義的教育観、習得メタファーに基づいて考えているか、「さまざまな相互行為のためのリソースを徐々に身につけ、実践への参加を十全なものにしていく」という構成主義的教育観、参加メタファーに基づいて考えているか。

3) 活動で生起するコミュニケーションの真正性、あるいは疑似性の程度

4) 活動内容の個別化の程度(学習者それぞれが自分で話したいことを話しているか)

5) 活動内容の文脈の程度(実際の文脈の中で活動を行っているか・内容とコンテキスト、条件、制約、領域、テーマは関連づけられているか)

- 6) 活動で意志・意味を理解し合うための意味交渉(negotiation of meaning)が生じる可能性があるかどうか。フォリナー・トークなどの調整された日本語が使われる可能性があるかどうか。
- 7) 活動を通して学習者が得られるインプットの量と質の差
- 8) 活動を通して参加者が行うインターアクション(相互交渉)の量と質
- 9) 活動を通して得られる気づき(こう言えばいいんだ！こう表現すれば通じる！この発音では通じない！)の可能性

振り返り

オリエンテーション時にウォーミングアップとして以下のキーワードについて話し合ってもらいました。×、△が減り、○、◎が増えましたか。もう一度、自己評価と内容を思い出してください。

課題0 ウォーミングアップ

まず、以下のキーワードについてどのくらい知っているかマークを付けてください。

(◎)よく知っている。説明ができる。

(○)知っている。自信はないが説明できる。

(△)聞いたことはある。何となくこういうことか、というイメージはある。

(×)聞いたことがない。

- ()直接法
- ()オーディオ・リンガル法
- ()コミュニカティブ・アプローチ
- ()コミュニケーション能力(伝達能力)
- ()インターアクション能力(相互行為能力)
- ()客観主義的教育観
- ()(社会)構成主義的教育観
- ()社会文化的アプローチ
- ()状況的学習論

★ ウォーミングアップでは提示しなかったキーワード

- ()サイレント・ウェイ
- ()ナチュラル・アプローチ
- ()習得メタファー
- ()参加メタファー

★ なお、課題0では以下の用語も挙げましたが、途中でカリキュラムを変更したので、以下のものは扱っていません。

- ()ストラテジー
 - 学習ストラテジー・コミュニケーションストラテジー

() 認知・メタ認知

() 自律(的)学習・学習者オートノミー